初期生活綴方教育の実際
―― 小砂丘忠義の文章指導を例として ――

飯　田　和　明※

The Practice of Early Movement of 'the Composition based on Daily Life'
―― In the Case of Sasaoka Tadayoshi's Teaching of Composition ――

Kazuaki IIDA

生活綴方教育という概念とその実態には，様々な解釈と実践上の変遷が存在するが，今日におけるその受容には，戦後の同教育の解釈と実践とに大きく依拠している状態が認められる。本稿は，その受容の様態を検討することから研究上の取り扱いに関わる問題点を指摘し，生活綴方教育の萌芽とされる『綴方生活』誌の中心的役割を果たした小砂丘忠義による子ども向け雑誌『鑑賞文選』『綴方読本』における文章指導を例として，生活綴方教育研究の歴史そのものを対象化し，初期生活綴方教育における教育の事実を明らかにしていくことによる研究の有効性を示唆するものである。

はじめに

生活綴方教育は，戦前の小砂丘忠義等による『綴方生活』誌をその重要な萌芽の一つとして現出し，多くの有効な理論と実践を生み出してきた。教育を学校の内にあるものとしてだけではなくそれを学校の外と切り結ぶ上でも，日本の教育史上においてその果たしてきた役割には大きいものがあったといえる。教育という営為がその性質として，社会，政治，経済，文化といった様々な要因を抱え込みつつ不断に生成されていくものであることを明らかにしつつ，現実に生起するリアルな問を教育の内に取り上げていくことを可能にしてきたのである。生活綴方教育は，その問に，文章指導という角度から取り組んできたものといえるだろう。

生活綴方教育という概念とその実態については，今日に至るまで様々な解釈と

※筑波大学附属中学校

その実践上の変遷が存在しているが，今日における生活綴方教育の受容を見るに，そこには，戦後の同教育の実践と解釈に大きく依拠している実態があり，ある種のバイアスが無批判に受け継がれる事態を確認することができる。研究においてその内容となるものごとの対象化は不可欠な要件であるが，生活綴方教育の研究においては，それを支えてきた枠組みや前提そのものを見出す作業が現在必要とされているように思われる。そして，そのためには教育という営みを取り巻き，それを構成する多様な分野における議論を取り込んだ検討が必要となる。

本稿では生活綴方教育受容の様態を，国語教育に関わるジャーナリズム，言論，研究という複数の方面から検討し，その研究上の取り扱いに関わる問題点を指摘する。そして，従来十分に取り上げられていなかった，小砂丘忠義等の出版した子ども向け綴方雑誌である『鑑賞文選』『綴方読本』を中心的な史料とし，その文章指導を例として検討することから，初期生活綴方教育における教育の事実の一端を明らかにし，今日の教育を論ずるに参照される，生活綴方教育研究への方向性を与えようとするものである。

1．今日における生活綴方教育受容の様態

生活綴方教育の今日的受容を考えるに当たり，まずは，近年よく読まれた『文章読本さん江』（斎藤美奈子　2002）の一節を参照することにする。

> 少なくとも高度経済成長期以降，「生活綴り方」ということばはあまり聞かれなくなった。理由は二つあるように思う。ひとつは鮮度の問題である。芦田恵之助の随意選題からまたたくまに四十数年，「あるがままに書け」「思った通りに書け」はすでに作文教育界のすみずみにまで浸透していた。「話すように」にも「あるがままに」にも「思った通りに」にも，いや私ノンフィクション風（ママ）の作文じたいに，人々はそろそろ飽きていたのではなかろうか。もうひとつは経済の問題である。国分一太郎は〈いわゆる生活綴方は，しいたげられた農民や労働者の師弟に対する愛情のいとなみであった〉と記している。『山びこ学校』が反響を呼んだのも，東北の貧しい山村の子どもたちという背景があったからこそだった。……日本社会が貧しさから脱皮していくのに呼応して，生活綴り方運動も歴史的な使命を終えたのではなかったか。（pp. 198－199）

本書は教育学の専門書ではなく，一種のカリカチュア的なものを含ませたエッ

セイではあるが，作文・綴方教育に関する一定程度の文献にあたり，歴史的な記述の体裁を為している書である。そして，教育という営みが社会，政治，経済，そしてジャーナリズムといった現実に生起する諸現象と切り離しては考えることのできない，不断の生成になるものごとの総体である以上，本書における記述と，それが一定の読者を得ているという現実は，看過されてはならない教育の「事実」であるともいえる。

著者は，「Ⅲ作文教育の暴走 豊かさの中で－戦後の作文教育」の「生活綴り方か，作文教育か」という節の中で，「国分一太郎の生活綴り方擁護論」と「倉沢栄吉の作文教育推進論」とを対比させることにおいて本記述を為している。この論述におけるフレームである「生活綴方か，作文教育か」という図式の妥当性については，例えば，日本作文の会編集による『生活綴方事典』(1958) の中で，「コトバの教育としての生活綴方」という項を国分一太郎が，「国語科作文としての生活綴方」という項を倉沢栄吉が，ページを並べて執筆していること，及びその記述内容（pp. 27－29）を視野に入れた検討等が必要となるであろう。そういった議論を経ることなく成立し，流通してしている言説の存在は，今日における生活綴方教育受容の一端を示しているといえるだろう[1]。

次に，生活綴方の「定義」が国語教育研究においてどのようなものとされているかという点に着目し，『国語教育辞典』（日本国語教育学会編　2001）での記述を見てみたい。

「生活綴方」の項（p. 224）には，「戦前の生活綴方の伝統を継承している団体である日本作文の会は，会の刊行した『講座・生活綴方』のなかで……と定義している」とある。その「定義」に当たる部分は，『講座・生活綴方　第一巻　生活綴方概論』(1962)「Ⅰ生活綴方の本質」の「一　生活綴方の意義　㈠子どもの側から見ての定義」（国分一太郎）の全文掲載である[2]。国分一太郎は，戦前から綴方教育の有効な実践を生み出し，戦後はその運動における有力な論客の一人となった人物である。『国語教育辞典』の【文献】として挙げられている『生活綴方事典』(1958) における，国分による「生活綴方」の定義には以下の文言が見られる。

> 生活綴方とは，生活者である子供たち（またはおとなたち）が，外界の自然や社会・人間の事物，または自他の精神の内部にふれたときに，考えたことや感じたこと，つかみとったものを，それが出てきたものである事物の形や

動きとともに，ありのままに具体的にいきいきと文章に表現したものをいう。この際生活綴方に「生活」という限定を加えるのは，生活者が書くからであり，「綴方」といわれるのは，大正のはじめ以後，わが国の民間教育運動のなかで育ったリアリズムの綴方の伝統・遺産を受け継いだ性格の表現をとらせるからである。またこの生活綴方の作品では，自分のものになったコトバ，体験に裏付けられたコトバで書かれることをことのほか大事にする。(p. 21)

ここには，斎藤の指摘につながる「生活者」「ありのままに」という語彙が見られるとともに，「自分のものになったコトバ」という，今日における教育・国語教育に関わる認識と実践について，特に「自己－他者」概念における論点に関して考察を進める際に重大な問題を発生する表現が散見される[3]。

国語教育の分野での言論に生活綴方教育受容の様態を見るものとしては，「作文による人間形成指導の無惨の一事例」(渋谷孝　2001) を挙げることができる。

ここでは，生活綴り方の理論的・実践的指導者の代表的な人の一人の小砂丘忠義の立場の一端を示して問題を考える。……小砂丘の提唱した立場は「ある少数の支配者の掠奪」と「下積みになった被支配者」を図式的な対立で捉える明快で単調な被害者史観である。小砂丘は，児童も教師も被害者であると見て「従順にして可及的能率を発揮しうる使用人」たるべき規制されているとする。そしてその状態に疑問を持って抵抗して，被害者と加害者の立場を逆転すべきだと提唱する。(pp. 117－118)

小砂丘忠義は，この引用にもあるように戦前の綴方教育界を舞台として重要な働きを為した人物だが，この記述における「図式的な対立で捉える明快で単調な被害者史観」といった，小砂丘の思想のフレームを二項対立的見方によって把捉する仕方については，当該論文においても参考文献とされている滑川道夫や中内敏夫をはじめとする諸著作によって，現研究段階としてその有効性が疑問視されているといえる。ここには，小砂丘忠義を生活綴方教育が胚胎する問題を代表する人物とみなすことによる，先の斎藤の認識に共通する，今日における生活綴方教育受容の一例が現れていると見ることができる[4]。

初期生活綴方教育研究において重要な位置にある小砂丘忠義については，教育学研究の立場から，志摩陽伍が『生活綴方再入門　自己表現力と認識の形成』(1992) において取り上げている。そこには「ホール・ランゲージと生活綴方の交流」等，今日的に生活綴方教育を捉え直す視点が示されており，「小砂丘忠義の

教育観」という節においては，小砂丘のエッセイ「人間性覚え書」に言及して，

> 今日の社会理論の観点からとらえなおすと，人と人との間に成立する対他的交通（communication）関係と，人とものとの間に成立する労働過程の両面の結合によって，人間性というものが歴史の中に形成されてきたとも読めるのである。(p. 113)

という小砂丘の「自己－他者」概念にも関わる興味深い解釈が提示されている。しかし，

> 今日の生活綴方では，子どもが「ほんとうのことを」「自分のことばで」「ありのままに」「能動的に」書くということが，実際の指導の際の重要な指導語として使われている。(pp. 117－118)

という記述には，生活綴方教育の今日的なあり方において，先の国分に近い認識が読み取れるように思われる。

以上の検討から見えるところは，今日における生活綴方教育の受容が，時に二項対立的な図式によるわかりやすいステレオタイプとして，また，それが戦後のある一時期の理解のされ方によって，その後の研究成果による検証を経ないままに今日に受け継がれている様態である。その具体の一例として，小砂丘忠義等の仕事は，一般文芸批評の分野においては，辺境にある一介の教師が中央に参加する手段として，子どもたちに「あるがまま」に書かせる「貧乏綴り方」の創始として，国語教育の分野においては，さらにプロレタリア思想を国語教育に持ち来たった源基として取り上げられる。そして，そういった認識を生活綴方教育及び国語教育研究が参照し，下支えするといった様相を呈しているのである。そこには，特に戦前における初期生活綴方教育の事実，及びその研究の成果が十分に反映されておらず，ある少数の史料とそこから見えるとされる「事実」によって，時に論者による現状の認識やその主張に性急に結びつけられた言表がなされ，さらにその連鎖において言論が再生産されるといった問題が存在している。このことは，生活綴方教育とその研究が，今日に至る戦後の教育の営みの中で教育の現実に働きかけるに十分な機能を果たしてこなかったことの理由になっているとも考えられるのだが，一方，このような教育における受容史を研究していくことは，こと生活綴方の問題だけではなく，教育に関するある一定の考え方の生成と受容，その盛衰の過程に伴う教育の事実の創出について検証していくためにも，非常に重要な作業であると考えられる。

2．小砂丘綴方教育における文章指導への着目

生活綴方教育の発生と成立については，中内敏夫（1970），佐々井秀緒（1981）をはじめとする諸論によって検討がされおり，その初期・胎動期における小砂丘忠義の果たした役割と，その仕事の重要性が指摘されている。小砂丘忠義（本名笹岡忠義　1897～1937）は，高知県に生まれ，8年8ヶ月の教員生活を経て上京，全国誌である綴方雑誌『綴方生活』等の雑誌編集にあたり，全国の子どもたちの綴方を読み，そこから教育の現実を看取しつつ全国の子どもや教師に向けて発信を続けた。

小砂丘研究は国語教育のみならず，生活指導論，民間教育運動史といった様々な側面から行われ有力な研究成果も残されている[5]が，それは未だ包括的なものとして成熟しているとはいえず，教育研究におけるその反映は十分なものとはなっていない。筆者はこれまで，主に小砂丘の個人史とその綴方理論に関わっていくつかの研究成果をまとめてきたが，本稿においては，従前言及されることの少なかった小砂丘等の編集発行した子ども向け雑誌である『鑑賞文選』『綴方読本』を中心史料として，その文章指導の面から検討を行うことにする。そのことによって，前節で見た，理念的に先行されることによって付与されたバイアスを取り除いたところに初期生活綴方教育の一端を描き，文章指導を介して小砂丘によってもたらされた教育の事実と，今日の教育を考える上で参照しうる生活綴方教育研究における方向性とを示すことができると考えるからである。

2－1　『鑑賞文選』『綴方読本』及び，小砂丘の文章指導に関する従前の言及

『鑑賞文選』は，1925(大正14)年に文園社から発行された学年別児童向け雑誌である。発刊当初，志垣寛が編集に当たったが小砂丘が後継し，変遷を経て『綴方読本』（郷土社）となった。高知時代の小砂丘の教え子でもある津野松生は，その著書『小砂丘忠義と生活綴方』（1974）において発行時の様子を記しており[6]，小砂丘の研究者である竹内功は，『人間教師　生活綴方の父・小砂丘忠義』（1998）において，「『鑑賞文選』の作品と小砂丘の文話（指導言）を土佐の子どもの作品（中村伝喜指導）から紹介しよう。」として，「お父さんのよつぱらい」という五年生の綴方と，それに対する小砂丘の評言とを掲載している（pp. 249－252)。『鑑賞文選』は，その発行部数が一時期には40万部に達するという，日本の教育史上に大きな足跡を為す仕事となっていったが，それは「学年別雑誌」という形態をとることで，全国の子どもたちを一つの学校における生徒のように見立てる，壮

大な民間教育事業といった形勢をも示していたといえるだろう。また，宮坂哲文は『生活指導―実践のための基本問題―』(1954)において，「全教育合力の上に立つ綴方」(『綴方生活』1932.12）に再録された『綴方読本（上級用)』にある「高木さんのくるしみ」という綴方と小砂丘の評言を取り上げ，生活指導の面に引きつけてその仕事を解釈し，生活指導教育の歴史の中に位置づけようとする試みを行っている（pp.44－47)。

『綴方生活』の同人でもあった今井誉次郎は，「小砂丘忠義」(1957）において子どもの綴方とそれに対する評言を考察の資とすることの重要性を述べ，いくつかの分析を施している。その一つである「ねこ」という一年生の作品と，それに対する小砂丘の，作者及びその「受け持ち先生」に対する評言は以下のものである。

ねこ

やねに　ねこが　ねて　います。
どこから　あがったのか　わかりません。
きょうは　とうとう　しれました。
うらの　かきのきから　あがりました。
〔評〕 そのねこは　きっと　かあいいねこでしょうね。 きみも　あがってみたいですか。(ささおか)

断片的な一節一節に，作者の個性が躍動しているところが嬉しい。秋のポカポカと暖かい日の出来事だということもはっきり印象ができる。幾日か屋根の猫を見てどこから上がるんだろうと，いわば子供らしい興味を持ちつづけていて，やっときょう，それがわかったといって喜んでいる子供の姿がはっきりくる。(小砂丘)

今井は，「作者の見ている立場が二個所に分かれている」ことに着目して，

ところが小砂丘は，そういうことには無頓着で，子供と同じように二個所から見て平気でした。こういうことは，図画などの場合にたとえると，小さい子どもたちが，箱などを書くのに，大人流の透視法によらないで，前から見たり，横から見たり，上から見たり，のぞいたりして，自由に表現することと同じである。こういうことは，文章のお師匠様の鈴木三重吉では，とうていできないことであった。ところが，子供たちを愛し，子どもの教育という観点から，小砂丘は，こういうことをらくらくとやってのけたのである。(p.

366)

と解説を加え，小砂丘が作品を通して子どもの視点に入り込み，そこから見えるものごとを看取した上で，綴方の指導に当たっていた様を描き出している。また「生活綴方の題材—何を書かせるか—」(1962) においても，先の竹内が取り上げた「お父さんのよつぱらい」に触れて，当時の雑誌『少年倶楽部』の「少年文壇」に掲載された八波則吉選・評の「親の恩」，及びそれに対する小砂丘の評言を引用・比較し，「作者の親を思う心の深さの違い」を指摘するとともに，小砂丘の評にある「人間の根強い心持」を，「本当の人間の真情である」と論じている (pp. 125－127)。

小砂丘研究において独自の論点を提出し，卓抜した考察を行っている中内敏夫も，いくつかの子どもの綴方作品とその評言を取り上げている。ここでは「生活綴方の原像考—小砂丘忠義論」(1970) における，今井が触れた「ねこ」についての論述を挙げる。

> 小砂丘は，ここで，なにがいるか，「ねこ」がいる，どこにいるか，「屋根」にいる，なにしているか，「ねています」，「どこから」きたか，「うらのやねの木から」のぼってきた，どうしてそれがわかるか，みていたら「きょう」，「とうとう」のぼるところがみえた，というふうに，描写対象が，空間的，時間的，因果的にその位置を明確にされることが，作中人物－ここでは，「ぼく」又は「わたし」のかたちで文字面の裏にかくれているのですが－が自然に対して自立化せしめられることの原因になると同時にその結果でもあるというとらえかたがあり，さらに，そういう関係の成立が，描写対象と表現主体，文章行為における内容と形式のぴったりした一致を保障するものだという考え方があります。それが，「作者の個性が躍動して」おり，「やっとそれがわかったといって喜んでいる子供の姿がはっきりくる」というかれのそれぞれの「評」の意味するところです。(p. 42)

この記述に続き，中内は「生活綴方のもっとも大きい特徴とされ，いわれてきた「ありのまま」の態度について，それは「「ありのまま」の心で自然（人事も含めて）に向かっていく態度ではない」ことを示し，「自分の考えことばや話しことばをそのまま書き言葉にせよといったたぐいの素朴リアリズム」とは異質のものであると論じている。さらに，

> 作中人物なり表現主体の自然からの立体的で行動的な自立，自立した主体に

してはじめて可能になる自然なり描写対象の対自的な認識と交換，これが，小砂丘の，文章，とりもなおさず書き手たる子どもの精神生活評価の主要な観点です。(p. 43)

という，小砂丘忠義綴方教育における「自己」概念に対する，日本教育史において大きな意義を持つものとしての位置づけとなる分析と評価とを導いている[7]。

2－2　滑川道夫による小砂丘文章指導に関する言及

滑川道夫は綴方雑誌『北方教育』において自身の活動を起こし，『綴方生活』の中でも盛んに実践と論考を発表していた。滑川は『日本作文綴方教育史』において，膨大な作文・綴方史料の収集，分析の成果を著しているが，その『第三巻昭和編Ⅰ』第七章「前期生活綴方教育の誕生」に，「一　生活綴方教育の前身」として，『鑑賞文選』『綴方読本』の史料としての重要性を示し，その歴史的推移を詳述するとともに，具体的な綴方作品と小砂丘の評言を掲載してそれに関する考察を行い，小砂丘文章指導の像を捉えうるいくつかの枠組みを示唆している[8]。

滑川は「ａ小学校低学年」と「ｂ小学校高学年」とに分けて「紙面での扱い方の類型を顧慮して多様性を抽出」した記述を行い，小砂丘らの仕事が『赤い鳥』における「綴方選手」的な作品の選考とその指導とは異なるものであるといった見方と，全国に拡がる読者とその雑誌の影響力に関し，次のような記述を為している。

「文の研究」欄や小砂丘の選評（学校ごとの選評を載せている号もある）や編集分担者の選評批評など「赤い鳥綴方」とは異って，綴方選手的でなくしだいに庶民的な生活行動的な表現のものへ向かって発展してきている。選評は紙面のつごうに合わせて短いものも長いものもあるというふうである。昭和六年以降になると，読者の地域が拡がってほとんど全国規模となっていく。樺太，北海道から九州さらに沖縄，朝鮮におよんでいく。(p. 428)

また，

……子雑誌を通して，読者である子どもに結びついて，編集者は，その指導者の役割を果たしてきた。同時に投稿する教師と結びつき，それが親雑誌との交流にも力を持った。……当時は綴方指導の教材が不足していた。学級の表現水準を引き上げようとするとき，こうした全国的水準を示す児童文集（全国版）が必需品であった。その点で綴方教育界に新しい刺激を与え，実践指導を推進する役割を果たした。(p. 461)

として，当時の教育状況における『鑑賞文選』『綴方読本』の位置と，その果たした役割に関する指摘を行っている。さらに『鑑賞文選』『綴方読本』に掲載された作品から選択して編集された，昭和六年版の『年間児童文集』（綴方読本編集部編 郷土社）にも触れ，

「赤い鳥」も休刊（昭４）に追い込まれる不況の連続の中で，これだけの文集が編集刊行され，しかも安価で提供されている。小砂丘中心の労作であった。……親雑誌「綴方生活」には昭和五～六年には新鋭な綴方教育論が掲載されていくが，「綴方読本」の方は，ゆるやかに，早急な実践化を求めずに，ひろくふかく子どもの眼のつけどころを指導していくという行き方であった。（p. 469）

と評している。多くの論客が集うその親雑誌『綴方生活』に，小砂丘がその「鯨」にも例えられる包容力をもって，時代の波を受けたさまざまな傾向の論文を取り込んでいったのに対して，彼のカラーがより率直に表れた子ども向けの雑誌，文集においては，「ゆるやかに，早急な実践化を求めずに，ひろくふかく子どもの眼のつけどころを指導していくという行き方」で当たっていたという指摘は，先に論じた今日における生活綴方教育受容の様態に鑑み，それを是正する見解として，非常に示唆に富む観察であるといえる。

滑川は「小砂丘さんの好きな作文 選評に見る指導性」（1987）において，小砂丘の取り上げた綴方作品と彼の評言に関して，次のように論述している。

……といったふうに作者ひとりびとりに呼びかけている。まるで学級担任が，学級文集の作者たちにことばをかけている感じである。そこに小砂丘さんの人間的なあたたかさがあり，ひとりびとりの作者の成長を見守っていこうという生活教育者の情熱と生き方を見ることができる。この点が，当時の鈴木三重吉の『赤い鳥』綴方の長文の批評指導と根本的な相違があった。『赤い鳥』綴方の方は，現実描写，生活叙写の表現面を主視点にした評価による指導性を発揮したが，『綴方読本』の小砂丘評は，その表現を支える生活の表現を重視する教育的評価がなされた。大ざっぱに言えば，文芸的評価と教育的評価のちがいがあった。同じ作品評価をするにも，いつも，作品の表現面を内から支える子どもの躍動する生活を見届けようとする意志がはたらいていた。だから，作者である子どもの成長発達が気がかりになって，つぎにどんな作品を書いてくるか，前の作品のいい点がどんなふうにのびていくのか，

が意識にのぼるのだろう。(pp. 27－28)

小砂丘の子どもたちに対する接し方を描きながら，『赤い鳥』綴方との違いを的確に記述し，小砂丘綴方教育における「継続」という重要な論点の指摘にまで至る論評である。

滑川はこの論考を終えるにあたり，「小砂丘の作品評にふくまれているもの」として小砂丘の文章指導における観点の整理を行い，「○長所をほめること　○はげましていること　○考えをひき出そうとしていること　○いかに生活に目を向けさせるかの示唆を与えようとしていること　○いかに書くかの方法・技術をくふうさせること」の五点を挙げている（p. 32)。また，

この最後の一項に不服の人があるかもしれない。昭和五，六年の時点においても，「技術」を軽蔑する風潮があった。技術主義の指導におちいることをおそれるからであった。小砂丘さんには，そのことを十分に計算に入れて，なおかつ技術指導の重視を説いたエッセイがある。(p. 32)

として，「評言のなかにも，意識的に表現技術を扱っているのが見られる」ことを指摘し，今日の研究においても十分な理解が及んでいない，小砂丘綴方教育における文章指導に対する適正な位置づけを施している点も見逃すことができない。

3．小砂丘綴方教育における文章指導の諸側面

小砂丘の綴方教育に関しては，その理論的な研究においてある程度の蓄積が存在するが，『鑑賞文選』『綴方読本』を中心とした彼の文章指導の実際に注目して，その先行論となる記述を包括的に扱いながら考究した例は存在しない。筆者は前節においてその整理を行い，それによって今日の生活綴方教育受容において理念的に先行されたことによって付されてきたと見られる問題点の是正を図りつつ，その研究の視点を示してきた。これを基にして，さらに高知県立図書館，及び旧小砂丘忠義記念館所蔵（現，高知県大豊町所蔵）『鑑賞文選』『綴方読本』における従前扱われていなかった史料の検討も含め，その整理を進めつつ，小砂丘忠義の文章指導に関する諸側面についての考察を進めていきたい。

3－1　文章技術指導

滑川が小砂丘の「文章指導の観点」についての整理を行う際，「この最後の一項に不服の人があるかもしれない」と付言したことに示されているように，小砂丘の文章技術指導に関しては様々な理解が混在している。それは今日においても，

例えば先に取り上げた渋谷（2001）の「……ここには，この児童の文章を添削する観点がほとんど無い。小砂丘は，老爺と運転手をきわめて形式的に対比している。」（pp. 119-120）という記述にも表れている。これは，小砂丘の「教育の煙幕的効果」（『綴方生活』1931.3）における「よくばりじいさん」という綴方に関する小砂丘の評をとりあげての文言であるが，そこに示されているのは，小砂丘にはある種の思想的なバイアスが持されており，彼の「作文指導の第一義的目標は人間形成にある」（p. 121）として，文章技術指導についてはそれを積極的に取り上げてはいないとする理解である[9]。

小砂丘の文章技術指導に関する研究としては，碓井岑夫「小砂丘忠義の綴方理論とその転回―『綴方生活』誌を中心に―」（1977）によって提起された問題に対する一連の研究が存在する。本件については，高知での小学校教師時代における文集「山の唄」「おとどひ」「蒼空」にはじまる広範な史料の分析が必要であり，そこには小砂丘による「自己－他者」概念の形成と，時の教育をとりまく状勢の看取における変移とを，彼の文章技術指導と密接に関係させて論じていく必要がある[10]が，それらは小砂丘をめぐる綴方理論，理念研究を主眼としたものであり，必ずしもその文章指導の実際を明らかにするものではない。ここでは，小砂丘の文章技術指導におけるその事実を示しつつ議論を展開していきたい。

まず，上記批判にもある「添削」という件については，「後木一夫君の「海」は，よく読んでから【評】にかいてあることをよんでみなさん，めいめいで，工夫してなほしてごらんなさい，文をなほすことを添削（てんさく）するといひます。添削も，綴方の仕事の中では，大切なものです。」（『綴方読本 上級用』1932.11）とあるように，それは「綴方の仕事の中で大切なもの」として位置づけられている。そして，小砂丘はそれを個人の作業としてだけでなく，相互批正の場において行われるものとする。さらにその批正の仕方について，「ひとの書いた綴方は，一回読んだならば，よみずてにしないで，つぎのやうな，しるしをつけてごらんなさい。　◎　とてもうまいと思う文　　○　そのつぎ，うまいと思ふ文　　、まづ，あたりまへと思ふ文　　△　すこし，まづいと思ふ文　そして，どこがうまいか，どこがまづいかといふこともかんがへて，――をひいたり，、、、、、や。。。。。をうつたりしてみるのもいゝことです。」（「みなさんへ」『綴方読本 尋常四年』1932.12）というふうに，その具体的な方法を指し示しているのである。

「綴方の題材と綴方を書く視点」についても，「アナタハ　オウチデ　オテツダヒヲ　シタコトガ　アリマスカ。ドンナ　オテツダヒヲ　シマシタ。ダレノ　オテツダヒヲ　シマシタ。　オテツダヒガ　ジヤウズニ　デキマシタカ。　アトデナニカ　ゴハウビヲ　モラヒマシタカ。　ソノ　オハナシヲ　カイテ　オクツテクダサイ。　ミンナ　カイテ　オクツテ　クダサイ。」(『綴方読本　尋常一年』1931.6) といった示唆を与え，具体的な題材の例を挙げて説明をしている。小砂丘は，「どんな」「だれの」「どのように（じょうずに)」と，綴方を書く上での「内容」「関係」「様態」における視点を示し，次いで「あとで」と，時間の経過を組み込んだ枠の中で書くことを示唆する。そして，「みんな」でと，「書くことを通じて共同するところの集団」について意識させているといえる。

小砂丘は，文章技術指導の細部にまでも顧慮を及ぼしていた。その一つの現れに「原稿の書き方」がある。彼は自身が原稿用紙に書いた「けむしやき」という綴方を載せ，「みなさん，綴方をおくるときには，つぎのとほり，きをつけてかいて下さい。一，はじめ題目，つぎに縣郡学校の名，学年，そのつぎに自分の名前をかく　二，，や。や「　」や（　）も字と同じく一つの□に一つかく」等，基本的な原稿用紙の使い方に関わる七項目を記している（『綴方読本　尋常三年』1933.11)。こういった側面を最も端的に表したものとして，『文章記述の常識』(1936) という著書の存在を挙げることができるだろう。小砂丘はその前書きに「……全篇私の独断で，至る所省察すべき無知をさらけ出してゐるだらうが，それでも尚且今日の小学校綴方界にはこの書が多少の貢献をなし得る余地があらうと自負してゐる。私に本書の執筆を思ひ立たせたのは，さふいふ小学校綴方界の状勢であつた。」と記し，著作を当時の綴方界に問いかけている[11]。小砂丘には，文章技術指導への確たる視点と意欲が堅持されており，それを時の状勢の中で，状況に応じて現実的に教育に実効あるものとして整合させていく見識と手腕とが持されていたのである。

3－2　文章指導の構成と意図

小砂丘は，その時代，対象学年にもよるが，いくつかの手法によって彼の文章指導の形態を構成している。ここでその包括的な史料整理を試みながら，考察を進めたい。

まずは，最も多く見られる文章指導のスタイルとしての「入選文」がある。これは，掲載された綴方作品のあとに比較的短めの評言を付すものである。但し，

滑川の指摘にもあるように，「入選文」といっても，単にその優劣・順位を付けるものではない。基本的に「研究」のための「入選」というおさえ方である。これに類するものとしては，「文の研究」という，上段に綴方作品，下欄に「総評」「書きぶりについて」「感想」といった分類で，批評を行うものがある。尚，「入選文」の形で，「文の研究」と同様に詳しく評言を付すスタイルのものもある。

また小砂丘は，「入選文」の後に「今月の綴方」として，あるこどもや学校に宛てた評言を記している。これは，「今月の綴方総評」「みなさんへ」「選後に」という標題をとることもあるが，いずれも雑誌に掲載されなかった綴方や，学校の取り組みについてのアドバイス，綴方を読み返すときの観点等を記したものである。さらに「選外佳作」として，入選外となった作品について，その題名・学校名・作者氏名の掲載を行っている。

「おたよりらん」では，「◇このらんには，諸君のちよつとした生活記録をのせます。◇この人は，こんなことをしてゐるのかと思ふとゆかいです。◇みなさんどうしの，おたよりだと思つてよんで下さい。◇ここへのせる綴方は，短いのにかぎります。」として，「あるひとまとまりの形をもった完成された作文」という範疇から外れた文章としての「綴方」を提案している。また「談話室」という，投稿してくる子どもからの便りの掲載と，それに対する返事にあたる文章を載せた，時に綴方指導から離れる内容も含むいわゆる「お便り」に類する形態もある。これらに読み教材としての性格も持つものとしての「文話」（綴方作品を基に綴方のあり方や書き方などについて記された文章），「綴方のお話」（必ずしも子どもの綴方作品を伴わない綴方指導に関わる文章），さらに「小砂丘は多忙な日々の中でも実にまめに手紙やハガキを書いて，直接，当人に対し個別の助言や激励を続けていた」という佐々井秀緒の証言（佐々井　1981）によって伺い知ることのできる「指導」を加えることができる。

これらの多様な形態を駆使して小砂丘の文章指導は行われていたわけだが，そこに彼の卓越したアイディアをみるに止まらず，それらが個々に独立したものとしてではなく，有機的に構成されたものであることに目を向けなければならないだろう。このことによって，小砂丘は全国の子どもたちに対して，その多様な個々の能力とそれぞれの現場の実態に対応した文章指導を展開し，その指導の場を保障し，さらにその場を介して子どもたち，また教師，学校間における相互交流を図っていたのである。

最後に，『綴方読本 尋常四年』(1932.5) の「記者だより」に記された「綴方読本」の性格，意図に関わる文言に触れておきたい。

- 「綴方読本」では，いつも，新しい，本当の綴方はどんなものであるかといふことを，みなさんに，わからせたいと思ひます。
- だからこの「綴方読本」は，まじめに研究する雑誌であります。文をよんだならば，お友達と一緒に研究してみてください。わからぬ所は，皆さんの先生にもきいて研究してください。また，四年生係へ，質問してくれれば私共は，よろこんで，お答へします。
- この「綴方読本」にのつてゐる文の，すべてが，大変いい綴方だとは，まだまだ，いへません。でも，これはいい綴方だとか，これはかういふところがいけないなど君たちが研究をするのには，つごうのよいものばかりです。そのつもりで，よくよんで下さい。
- 題名のつけ方や，ことばのいひまわし方や，文の切り方なども，おひおひ研究してゆきませう。君方も，そのつもりで，一心になつて書いた文を送って下さい。私たちも一心になつてよんでみます。どうしても，一生懸命にならなくては，だめです。　－小砂丘忠義－

「書かれた文章を基にした相互研究」という意図が，明確に表れている文言である。小砂丘は取り上げた綴方作品を「規範的な教材」にはしない。それは，「子どものものだからいい－子どものものだから直すところがある」という見方によって取り扱われてはいないのである。また，子どもたちに向けて「研究」というかなり高度な学力を求めているといえる。彼らを子ども扱いせず，「君方」も「私たち」も「一心になつて」，共に同じ方向を向いて「新しい，本当の綴方」に向かって開けていこうとする小砂丘の姿勢を見ることができる。そこには，作品を選考することによって采配をふるう指導者の姿ではなく，全国の子どもたちの綴方によって現実を確認しつつ，綴方教育を通して現実に介入し，新たな価値を子どもたちと共に創造していこうとする教育者としての姿が示されているといえるだろう。

以上，小砂丘の文章指導におけるその技術，構成，意図といった面から史料を取り上げてきたが，総じて見るに，ここには文章指導を介した「確かな学力の保障」への志向が表されているといえよう。それは，確かな文章技術を求めるものであると同時に，「子どもの作品によって」，「研究」するという方向をもって教育

を開いていくという意味においても画期的な実践であった。それは，子どもたちを教室，学校という枠に囲うことのない，人と人とをつなぐところの高度な学力である。滑川のいう「まるで学級担任が学級文集の作者達にことばをかけている」といった営為は，ここに示されるように，各時点における意識や能力の様々な一人一人の子どもの実態から出発し，そこに多様な手法で対応しつつ文章指導を構成することによって，あたかも大きな「学校」において，そこで接する子どもたち全員に対しての学力を保障する教育活動といった様相を呈していたのである(12)。

4．課題

以上，小砂丘忠義の文章指導の実際についてその一端を描いてきたが，『鑑賞文選』『綴方読本』における子どもたちの綴方作品と小砂丘の選評に関わる史料には，今後の検討を必要とするものが他にも数多く存在する。さらに綴方作品と評言とを直接に取り上げての論述を充実させていかなければならないが，それは，今日の教育を考える上でも参照することのできる，いくつかの論点の提出を可能にするものである。それは，国分によってもたらされた「自己－他者」概念における問題については「言語に付される他者性」を，小砂丘に強く表れている「相対的な視点の取り方」においては「閉じられようとする教育を開く視点」を，生活綴方教育研究においてはその「『生活』概念の再検討の可能性」を，それぞれに示唆する論点であるが，それらの議論については，そこに関連する小砂丘の『綴方生活』等における諸論と，小砂丘が主宰した郷土社の活動の検討をも含めて，他日に譲ることとしたい。

日々に更新される「教育の事実」は，時に無批判に受け継がれるバイアスを含み，それに対するわかりやすい構図を持つ言辞によってさらに自身を強化しつつ生成されゆくおそれを常に胚胎させている。言語に対するおそれとともに，教育に対するおそれをも感得しつつ，その実践，研究は行われなければならないゆえんである。小砂丘忠義は，眼前のその時々の状況を全的に飲み込みつつ，安易な二項対立を巧みに避けながら，「ゆるやかに，早急な実践化を求めずに，ひろくふかく子どもの眼のつけどころを指導していくという行き方（滑川）」によって，その仕事を推進していった。生活綴方教育の研究は，生活綴方教育運動展開の歴史そのものを対象化し，合わせて，小砂丘等を軸とするその初期段階における教育の事実を明らかにし，その実際に基づいた考察を進めていくことによって，正当

な受容に耐え，今日における教育を論ずるに参照される意義を生み出すことが可能となるであろう。

註

（1） 斎藤は「ガリ版刷りの文集という小舞台で展開し，その内容と規模から『貧乏綴り方』と揶揄されることもあった『生活綴り方』にも『大舞台への道』は開かれていた。優秀な綴り方作品を選んで載せる『鑑賞文選』（のち『綴方読本』→『新生綴方読本』と改題）のような綴り方専門の雑誌もあれば，学年別に編集された『年間児童文集』『全国小学校児童文集』のような書籍も多数発行されていた。辺境の地でくすぶっている熱血教師にしてみれば，指導の成果を形にできる張り合いのあるシステムだったのではないだろうか。」（p. 176）として，小砂丘忠義等の仕事にも直接に言及している。尚，『文章読本さん江』における生活綴方教育に関する記述に対しての，現時点での教育学的な研究成果を基にした批評については，拙稿（飯田　2003）を参照されたい。

（2） 「定義」に当たる引用部分は，次の文言である。
「生活者であると同時に，学校における学習者でもある，ひとりひとりの子どもたちが，それぞれの発達段階において，かれをとりまく自然や社会や人間（その内部の思惟・情動をふくむ）や文化の事物にみずから働きかけ，またそれらに働きかけられて，そこでとらえた事実や，自分のなかに生じた考え・感じなどを，事実にもとづきながら，あるいは実感をもととしながら，自分をとおして自分のコトバで，他人によくわかるような，ひとまとまりの文章にまで表現・定着させることを，「生活綴方の作品を書く」という。これが「生活綴方の作業」である。この「生活綴方の作業」では，このほかに，教師に指導されながら，自分の作品を自分で「吟味」したり，同じく教師にみちびかれながら，他人の作品を学級の共同のなかで「鑑賞・批評」することもふくまれる。」（p. 15）

（3） 本稿において考察の対象としている生活綴方教育研究における小砂丘忠義の「自己－他者」概念に関わる論点の整理，及びそこから導きうる議論については，拙稿（飯田　2000）を参照されたい。

（4） この文言に関する，小砂丘忠義関係の今日における研究成果を基にした批評については，拙稿（飯田　2003）を参照されたい。

（5） 生活綴方教育の発生，成立に関わる論考としては，中内敏夫『生活綴方成立史研究』（明治図書　1970），佐々井秀緒『生活綴方生成史』（あゆみ出版　1981）ほか，多数のものがある。また，小砂丘忠義に関する研究においても，今井誉次郎「小砂丘忠義」（『講座学校教育』第２巻〈日本教育の遺産〉明治図書　1957），中内敏夫「生活綴方の原像考―小砂丘忠義論」（『教育』国土社　1970.2），碓井岑夫「小砂丘忠義の綴方理論とその転回―『綴方生活』誌を中心に―」（『季刊 教育運動研究』№5　あゆみ出版 1977.7）ほか，多くの論述がされている。筆者もこれまで「小砂丘忠義の綴方教育，その基底」（『人文科教育研究』第23号　人文科教育学会　1996），「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導」（『日本語と日本文学』第29号　筑波大

学国語国文学会　1999)，「小砂丘忠義の綴方教育，その構造―「自己」「他者」概念の検討を中心に―」(『国語科教育』第47集　全国大学国語教育学会　2000) 等において，小砂丘綴方教育に関する論考を発表してきた。

(6)　津野は以下のようにその様子を記している。

「『鑑賞文選』は各巻とも文話を巻頭におき，童話，名文例，児童の作品を満載した。学年別に児童の学力に相当する文話，文例，童話を選択することは，相当至難であった。そのため千葉春雄（東京高師訓導)，奥野庄太郎（元成城小学校訓導)，田中豊太郎（東京高師訓導)，丸山林平（東京高師訓導)，五味義武（東京女高師訓導)，菊池知勇（慶応幼稚舎訓導）などを語らい，学年別に指導協力方をお願いした。学年別にした児童雑誌の発行は，おそらくこれが創始であろう。」(pp. 68－69)

(7)　本件，小砂丘の「自己」概念に関し，筆者は中内による研究を参考にしながら，小砂丘における「他者」概念の分析を加えることで，よりいっそう整合的な説明を与え，その成果を基に「小砂丘綴方教育の構造」を描出している。その具体的な論展開については，拙稿（飯田　2000）を参照されたい。

(8)　『鑑賞文選』『綴方読本』の史料としての意義とその現状については，次の文言が記されている。

「「鑑賞文選」「綴方読本」一連の史料は，その重要性にもかかわらず，散在のまま集成されていない。現在のところ復刻の話もきかない。したがって，その全貌を視野におさめて実証的に叙述することは困難である。ここでは，筆者所蔵のわずか九十冊ばかりを手がかりにして，不十分な考察を述べることになるだろう。」(p. 414)

(9)　この綴方「よくばりじいさん」に関しては，さらに，例えば「朝鮮人」(『綴方読本』尋常六年1931. 2) という綴方に対する小砂丘の評「そういふ，こじきみたいなことでもしなければ，ほかに生きてゆく道がなくなつた人たちでせう。その女の人が，どんな風な人であつたかその人のかほつきやみなりがあなたに，何かもつとほかのことを考へさせるやうなことはなかつたでせうか。」等を参考にして，生産的に考察を進めることができる。ここで小砂丘は，物事に対する先入観を外して目の前の事態を丁寧に書ききることによって，その奥にあるものを見ようとするいわば「眼に見えぬものへのまなざし」といったものを子どもたちに求めているように思われるのである。このように，小砂丘の取り上げた綴方とその評言によって，今日に参照しうる生活綴方教育研究の可能性を描いていくことができるが，それには別途，一定程度の議論と紙幅が必要となる。稿をあらためて行いたい。

(10)　碓井によって提起された小砂丘における文章技術指導の理論的研究に関わる先行論の整理と，そこから導き出される論点に発する考察については，拙稿（飯田　1999）を参照されたい。

(11)　『文章記述の常識』(文園社　1936) は，高知県立図書館所蔵。以下，史料として，目次より章立てを記す。「第一篇　国語と国民　第一章　言語の変化転成　第二章　国語の混乱」「第二篇　記述上の諸規則　第一章　仮名遣法　第二章　送仮名法　第三章　句読法　第四章　分別書法　第五章　文法上の許容法」「第三篇　記述の実際　第一章　原稿の書き

方　第二章 書き誤り易い仮名　第三章 書き誤り易い熟語一覧表」

(12) 「文の研究」において，小砂丘は読者である子どもたちに，次のように直接に話しかけている。

「先月もいつたやうに，一人か二人，とくべつにすぐれた文を書いてくれるのも，わるくはないが，みんなが一やうに，そろつて進んでもらひたいのです。みんながしつかり勉強して下さい。」(「今月の文について」『綴方読本　尋常五年』1934.9)

また，次のようにも述べている。

「自分の名が誌上に出たとか出ないとかを考へてゐるひまはない。……何回没書になつたとて，私たちは一つ一つの作品については，まじめに眼をみはつてゐる。いゝかげんな少年雑誌みたいに，やたらに名前をあげておだてたりしないかはりに，むざむざとそれをすてて顧みないやうなことはしない。……その中にはきつといゝ文がかけるやうに私たちはしてあげるつもりです。」(「綴方総評」『読方綴方鑑賞文選　高等科』1929.8)

引用文献

・飯田和明（1996）「小砂丘忠義の綴方教育，その基底」『人文科教育研究』第23号　人文科教育学会

・飯田和明（1999）「小砂丘忠義におけるプロレタリア教育の影響と「表現技術」指導」『日本語と日本文学』第29号 筑波大学国語国文学会

・飯田和明（2000）「小砂丘忠義の綴方教育，その構造―「自己」「他者」概念の検討を中心に―」『国語科教育』第47集 全国大学国語教育学会

・飯田和明（2003）「小砂丘忠義の綴方教育，その「教育の事実」」『日本語と日本文学』第37号　筑波大学国語国文学会

・今井誉次郎（1957）「小砂丘忠義」『講座学校教育 第二巻〈日本教育の遺産〉』明治図書

・今井誉次郎（1962）「生活綴方の題材―何を書かせるか―」『講座・生活綴方　第一巻　生活綴方概論』百合出版

・碓井岑夫（1977）「小砂丘忠義の綴方理論とその転回―『綴方生活』誌を中心に―」『季刊教育運動研究』No.5　あゆみ出版

・国分一太郎（1962）「生活綴方の本質」『講座・生活綴方　第一巻 生活綴方概論』百合出版

・斎藤美奈子（2002）『文章読本さん江』筑摩書房

・佐々井秀緒（1981）『生活綴方生成史』あゆみ出版

・渋谷孝（2001）「作文による人間形成指導の無惨の一事例」『教育科学国語教育』No.602 明治図書

・志摩陽伍（1992）『生活綴方再入門　自己表現力と認識の形成』地歴社

・竹内功（1998）『人間教師　生活綴方の父・小砂丘忠義』高知新聞社

・津野松生（1974）『小砂丘忠義と生活綴方』百合出版

・中内敏夫（1970）「生活綴方の原像考―小砂丘忠義論」『教育』No.244　国土社

・滑川道夫（1983）『作文・綴方教育史３　昭和編Ⅰ』明治図書

・滑川道夫（1987）「小砂丘さんの好きな作文　選評に見る指導性」『作文と教育　特集 生活綴方の父・小砂丘忠義氏に学ぶ』日本作文の会
・日本国語教育学会編（2001）『国語教育辞典』朝倉書店
・日本作文の会編（1958）『生活綴方事典』明治図書
・宮坂哲文（1954）『生活指導―実践のための基本問題―』朝倉書店